

かかわらず、種皮の部分をわずかに噛みけずるのが散見された程度であった。なお、武士泊りの浜では、ハマナシの実が好んで食われていた。

動物では、クワガタムシ、セミ、ヨコエビ、トビムシが好まれ、アブ（二種）も食われていた。

臥牛山の群れの社会変動の追跡と分裂群

古屋 義男（高知女子大・家政）

臥牛山の群れについては、1971年7月に個体数調査をおこない、その結果は本年報 Vol. 2 (1972) に報告した。本年の調査目的のひとつは、この群れのその後の変動を追跡することであった。

1971年当時、リーダーは第1位 Mon（推定30才以上）、以下 Katame（20～25才）、Gon（19才・一生年が確認されている）、Kobu（16才）の4頭、サブリーダーは Yasu（11～15才）、Kuni（10才）、Ken（8才）の3頭であった。

1. 1971年12月上旬、Mon の順位下降、Kobu の離脱という変動がおこった。“Mon は、第1位から第7位、つまりサブリーダーの Ken の下位にまで順位が下降した。このとき Mon をはげしく追ったのは Gon と Kobu であった。Kobu は、それより約10日後、左足に大怪我をして餌場にあらわれ、それから3日後姿を消した。怪我も他のサルによるものか、野犬によるものかわからない。”（臥牛山自然動物園藤田村治氏による）。

2. Mon は、その後もそのままの地位で群れにとどまったが、1972年9月、群れが約10日間の遊動をして、餌場にもどってきたときに姿を消していた（藤田氏による）。

3. 臥牛山の群れの個体数は、1971年の調査時に155頭と推定した。1972年に25頭出産、1972年中に捕獲されたサルは約20頭と推定される。自然死および群れからの離脱は確認されたものだけで5頭（Mon、Kobu、老令のメス2頭、1972年生まれのアカン坊1頭）である。一方、群れの移動時に個体数をかぞえる方法による1972年10月のこの群れの推定個体数は140～150頭であった。

4. Mon の群れからの離脱は、上記の結果から、メスをつれて10頭程度の分裂群を形成してでていったという可能性を否定することはできない。

5. 1972年10月には、Yasu、Kuni もくわえて4頭のリーダー、Ken のサブリーダーという構成となった。Ken は中心部ではメスに追われる等、Yasu、Kuni とは行動上、明瞭なちがいが認められる。

臥牛山の群れに関してのもうひとつの調査目的は分裂群の動向であった。1955年以後、5回の分裂がおこった

が、これまでに餌場につねに現われる主群の他に1群の存在しか確認されていない。その群れは約50頭とみられていた。

この分裂群のさらに詳しい確実な資料を得るために、本年は調査日数の大半をこれにあてたが、目撃できたのは2回にすぎず、今後課題はもちこされた。数人同時に追跡する方法など、調査方法を改めねばならない。

1. 2回の直接観察と遊動域内の住民よりの情報をあわせてみると、1群しか存在しないこと、その数は50頭よりさらに少なく30頭と推定されること、この群れは餌場へは絶対にあらわれず、遊動域を餌場の反対方向にすこしずつ拡張していること、などは確かである。

2. オスのヒトリザル、あるいは数頭よりなるオスだけのグループが、主群ならびに分裂群の遊動域外の周辺地域に出没することが最近多くなっている。これらのサルは比較的人馴れをしていることから、臥牛山の群れからでていったものと考えられる。

3. 分裂群はオスがメスに比して多い構成をもっているため、分裂後再離脱するオスがでて、分裂群はさらに個体数をへらすことは予想されていたことであった。この点のさらに詳しい調査が今後に残されている。

野生ニホンザルの日周活動リズム¹⁾

四元 伸子（東大・理）

はじめに

筆者は前年度にひき続いて、高岩山自然群（I-b 群）の遊動生活を調査した。現在、資料を整理中であるが、今回は比較的整理の終わった1972年11月の調査について報告する。12日の調査期間のうち、観察日が6日間であり、そのうち9時間以上直接追跡のできた日が3日間である。

遊動の概略

11月1日から5日まで、I-b 群は観音堂、高岩山、飯場尾根、湊川上流域に囲まれる付近を遊動し、11日から13日にかけては、石射太郎の北東方向から小糸川を渡り、石射太郎を経て高岩山尾根道沿いに観音堂へ出、南下して飯場尾根の南の尾根を湊川上流へおりるという遊動を行なった。

この時期の遊動コースを規定する主要な食物は、ヤブニッケイの実であり、遊動コースを部分的に規定するものとしてリュウキュウマメガキ、ヤマノイモの種子が挙げられる。しかし、11月12日はクスノキの実が集中的に採食された。

¹⁾ 岩野泰三・西田利貞（いずれも東大・理）との共同研究。